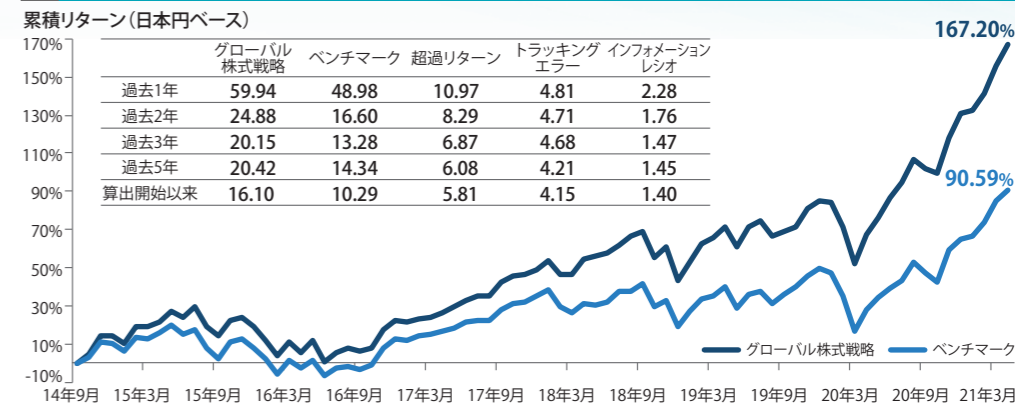


運用開始以来のパフォーマンス推移(2014年9月末～2021年4月末)



Nikko AM Global (以下「会社」という)のグローバル株式戦略のコンポジットリターン(豪ドルベース)を日本円ベースに換算したものを表示しています。会社は、グローバル投資パフォーマンス基準(GIPS®)への準拠を表明しています。詳細については下段の注記をご確認ください。過去のリターンは将来の運用成果等を約束するものではありません。上記に掲載される指数に関する著作権・知的財産権その他一切の権利は、当該指数の算出元または公表元に帰属します。

を行ってきましたが、SFDRを契機に改めて外部に発信し、コミットしています。

桑原 一部の投資コンサルタントも「実証されたESG運用かどうか」を重視しており、マネジャーの投資スタイルに応じて評価に重きを置くESG分野が

変わってきました。例えば、私たちのようなグロース・バイアスを持つマネジャーの場合、CO2排出量が少なく従業員が多いサービス業への投資が多い傾向にあるため、「S」への取り組みにフォーカスして評価が行われます。——ESG投資の客観的評価が可能になれば、アセットオーナーも取り組みやすくなります。

桑原 当社のポートフォリオはESG評価会社からもベンチマークを上回る評価を得ています。とはいえ、スコアが

低い企業に投資しないわけではありません。

例えば米国のパロマー・ホールディングス*は、地震保険において高い競争優位性をもつ損害保険会社ですが、あるESG評価会社は従業員教育が不十分であるとして「S」のスコアを低く評価しました。しかし、当社は企業訪問や経営者との面談から、社員の多くが高い専門性を有しており、必ずしも従業員教育が不十分とは言えないと判断して投資を継続しています。また、

対話を通じて経営陣には評価会社への説明を提案しており、今後はスコアが改善に向かうと予想されます。

当社はスコアを参考にはしても依存はせず、すべての投資行動の前に必ず調査と対話を行います。そのうえで株価値および社会や環境に対して重大な課題かどうかを精査し、確信が持てる銘柄にのみ投資します。

このような投資哲学もまた、「パフォーマンスを犠牲にしないESG投資」の実現につながっているのです。 AD

日興アセットマネジメント

パフォーマンスを犠牲にしないESG統合型投資戦略「社会的使命に応える」株式アクティブ運用に邁進

優れた運用成績で投資家の支持を集める日興アセットマネジメントの「グローバル株式戦略」。コロナ禍後も好調な運用を続ける同戦略だが、最近ではESGを取り巻く環境の変化がさらなる追い風になっている模様だ。運用チームとともに英国で業務にあたるプロダクトスペシャリストのキャメロン・桑原氏と東京在住のシニアプロダクトマネージャーの村上修平氏に話を聞いた。

——昨年、力強い回復を見せた株式市場も今年4月以降は足踏み状態です。

貴社戦略の運用状況はいかがですか。

村上 市場では経済正常化が意識されてテクノロジー銘柄の価格調整が進み、グロース系マネジャーの多くが苦戦しているようです。当社の「グローバル株式戦略」もグロース・バイアスを持つ運用戦略ですが、こうした向かい風の中でも年初来でベンチマークのMSCI ACワールド・インデックスをアウトパフォームしています。

桑原 なぜ超過リターンを獲得できているのか。当社の運用は「事業」「経営陣」「バランスシート」「バリュエーション」の4つを満たす「フューチャー・クオリティ企業」に厳選投資するもので、このプロセスには投資先企業が「社会的使命に応えているか」というESGの観点が統合されています。

コロナ禍によって、経営者は高水準の業績を維持するには株主のみならず、従業員や消費者、社会、地球環境など、全てのステークホルダーに目を向けるという意識を高めました。その結果、今日ではESGの要素がリターンやリスクに大きな影響を与えているのです。

——「社会的使命に応える」企業とは、

具体的にはどんな企業なのでしょうか。

桑原 「社会的使命に応える」とは、「社会的課題に対するソリューションを提供している」と置き換えられます。

例えば、当社が投資しているソーラーエッジ・テクノロジーズ*は、太陽光パネルが発電した電力を家庭やオフィス用に変換するインバータのメーカーです。太陽光発電は脱炭素を図る上で中心的な役割を果たすものですが、火力発電と比較して発電効率の低さが課題となっています。その点で同社の製品は電力変換に伴うロスを省き、エネルギー効率を改善することで脱炭素化に貢献を果たすものです。

他には、米国のアボット・ラボラトリーズ*が良い例です。コロナ禍以前から世界中で医療コストの増大が課題となっていて、特に糖尿病の治療にかかるコストは全体の2割弱を占めると言われています。同社が開発した着用型センサーは、採血をせずともスマートフォンや小型機器を使って血糖値をモニターでき、薬を飲むタイミングを管理することが可能になります。アボット社は同業他社と比較して安価かつ小型の装置を提供しており、利用者の心身や金銭面の負担を軽減し、医療

コストの削減という社会課題の解決にも貢献すると考えています。

——今やESG投資は世界的な趨勢ですが、アセットオーナーからの反応はいかがですか。

村上 ESG投資については「パフォーマンスを度外視しているのでは」そして「パフォーマンスが良い運用のESGは見せかけなのでは」という2つの懸念があるようです。前者については、当社の運用が「パフォーマンスを犠牲にしないESG投資」であることがご理解いただけるかと思えます。

後者はいわゆるグリーンウォッシュやESGウォッシュと呼ばれるもので、これに関して欧州ではいくつかの動きがあります。まずは「EUタクソノミー」と呼ばれる投資先企業の事業がサステナブルかどうかを判断する基準作りが進んでいること。もう1つは、今年3月に導入されたSFDR(資産運用会社等のサステナビリティ開示規制)です。これによってマネジャーにはESG投資の中身が伴っていることを実証し、開示するよう定められました。当社はこれまでタバコや兵器産業、あるいは重大な不祥事を抱える企業には投資しない、といったルールのもとで運用